

【第一夜】

シューマン：6つの即興曲《東洋の絵》より

シューマンの「6つの即興曲《東洋の絵》」は、1848年に作曲されたピアノ連弾（1台4手）のための組曲。妻クララへのクリスマスプレゼントとして書き上げたもので、アラブの文学にインスピレーションを得た、異国情緒と情熱に満ちた名品として知られている。本公演では、躍動感と流麗さを合わせ持つ「第1曲：変ロ短調」、歌に満ちた穏やかな曲調の「第2曲：変ニ長調」、情熱的で力強いリズムが特徴的な「第5曲：ヘ短調」、物語の結末を暗示するかのような、悔恨と祈りに満ちた「第6曲：変ロ短調、変ロ長調」の4曲をお届けする。

シューベルト：ピアノ三重奏曲《ノットウルノ》

10分ほどの単一楽章の小品で、死の前年に書かれた。自筆譜には「アダージョ」と記されていることから、独立した作品ではなく、「ピアノ三重奏曲 第1番 D898」の緩徐楽章として構想されたが、採用されなかったのではないかと推測されている。イタリア語で「夜の」あるいは「夜想曲」を意味する《ノットウルノ》という表題は、シューベルトの死後、出版の際につけられたものだが、ロマンティックで甘美な作品内容をよく表わしている。

ブラームス：ピアノ四重奏曲 第1番 より 第1楽章

「ピアノ四重奏曲 第1番」は1855年頃着手され、1861年秋に完成した、ブラームス20代後半の作品。初演は1861年11月にハンブルクで行なわれ、クララ・シューマンがピアニストを務めた。今回演奏される第1楽章の特徴は、提示部に反復指定がないことと、5つの主題が次々に現れること。曲の冒頭で、4音からなるト短調の第1主題をピアノが提示したのち、4つの主題が続く。提示部の反復がない代わりに、展開部の冒頭は提示部とまったく同じ10小節で始まるが、すぐに激しい展開部へと引き込まれる。第1主題の「4音動機」が徹底的に変容・発展しながら、緊迫感を高めていく。再現部では、提示部で現れた多彩な主題がト短調を中心とした調性で回想される。そして、コーダ（終結部）に至って、大きな盛り上がりを見せ、ト短調の暗い情熱を保ったまま、劇的な結末を迎える。

メンデルスゾーン：弦楽八重奏曲

弦楽八重奏曲という編成は珍しく、そのなかではメンデルスゾーンの本作がもっとも有名で演奏機会も多い。1825年、メンデルスゾーン16歳の秋にわずかな期間で書き上げられ、1832年に改訂を施し、1842年に出版された。ヴァイオリン奏者で幼い頃からの友人でもあったエドゥアルト・リーツに捧げられた。

第1楽章は、勢いのある第1主題と柔らかな雰囲気第2主題によるソナタ形式。第2楽章は、大胆な転調を交えて展開する緩徐楽章。第3楽章は、ゲーテ『ファウスト』の「ワルプルギスの夜」の最後の語句に靈感を得たとされるスケルツォ。終楽章は、自由なフーガ形式によって大きなクライマックスを築き、力強く曲を閉じる。